

写真コンテスト応募作品に みる飛鳥の景観とその表象

1 はじめに

景観と景観表象 地理学において、景観は決して客観的に存立する土地の相貌ではなく、社会的な構築物でもあることが意識されて久しい。20世紀初頭以来、普遍的な存在として信頼されてきた景観の概念は1980年代に揺籃をみせた。その結果、景観は様々な主体の思惑や作為によって形成される、特定の人々の景観認識を反映したテキストとしても扱われるようになった。

同時に、地図や絵画といった景観表象は、地域の景観を分析・復原するためだけでなく、作者の意図や景観認識を抽出しうる素材となった。写真でさえも、構図などの点に着目して、撮影者の意図が検討されている¹⁾。本報告では、こうした景観及び景観表象の性格を念頭に、飛鳥資料館第14回写真コンテストに寄せられた写真に分析を加える。撮影者が捉えた飛鳥の景観から地域特性を抽出すると同時に、いかに飛鳥の景観が認識され、表象されているかを検討したい。

飛鳥資料館写真コンテスト 飛鳥資料館写真コンテストは、2011年に明日香村の大字稲渚・栢森・入谷いなぶち かやのもり にゅうだに一帯が「奥飛鳥の文化的景観」として国の重要文化的景観に選定されたことを契機に開始された。この企画は、2004年に新たに文化財類型に加わった「文化的景観」としての飛鳥の魅力を発信することをねらいとしていた²⁾。

いわゆる古都保存法や明日香法によって歴史的風土が保たれてきた明日香村一帯では、奥飛鳥に限らず、広義の文化的景観が形成されている。そうした景観は、遺跡だけでなく、自然や生活・生業に関わる様々な要素から複合的に成り立っている。これまでの写真コンテストでは、飛鳥川、道、古墳、木、祭といった要素をテーマに作品を募集・展示することを通して、飛鳥の新しい魅力の発見・発信を目指してきた。2023年に14回目を数えた写真コンテストには、これまで500名以上から、計1,269点の作品の応募が寄せられてきた。

応募作品の概観 2023年の第14回写真コンテストでは「飛鳥のくらし」をテーマに、6月30日まで作品を募集した。寄せられた95作品のほとんどは生活・生業によっ

て育まれる文化的景観、もしくは文化景観³⁾を切り取った写真といってよいだろう。なお、写真の撮影時期は問わなかったが、概ね5年以内に撮影された作品が多かった。なお、撮影者の平均年齢は68.8歳であり、60～80代に集中している。

また、撮影者の2/3にあたる65名が奈良県在住者であり、うち明日香村在住者は9名、橿原市など隣接市町からは22名の応募があった。作品の多くは地域外からのまなざしによって捉えられた景観表象といえる。

2 撮影対象にみる地域特性と景観の諸相

撮影対象の分布にみる地域特性 撮影地点の特定に至らなかった5点を除く、90点の撮影地点を示した(図51)。本コンテストでは明日香村域に限らず、橿原市・桜井市・高取町などの一部も含めた広義の飛鳥地方を対象としているが、撮影者の多くは明日香村域で撮影に臨んだことがわかる。このことは「飛鳥のくらし」の題材としやすい景観が、明日香法に基づく景観保護が図られ、歴史的風土がより良好に保存されている、明日香村域に広がっていることも影響していよう⁴⁾。

図51には、撮影対象となった景観構成要素や生活・生業の種別を併記した。全体的な傾向としては、水田の撮影が卓越し、その多くが農林業の光景を捉えている。農作業とそれによって維持される景観が「飛鳥のくらし」の基盤を形作っていると認識されていることが確認できる。しかしながら、水田を写した作品をはじめ、要素の分布には地域差がある。こうした偏差は、飛鳥のなかでも、様々な要素が絡み合いながら、地域ごとに特徴ある景観が形成されている状況に起因すると考えられる。

稲渚集落よりも上流の飛鳥川源流域には、水田を対象とした写真はみられない。この地域では、代わって畑を捉えた作品が撮影された。付近一帯は谷底平野が狭隘なために水田面積が限られ、傾斜地を利用して畑が拓かれている。こうした土地利用の実態が、写真撮影の前提となっている。また、わずかながらも炭焼きや木材加工の光景が写され、山間部を特徴づける林業活動の様相が活写された。そして、栢森の集落内や飛鳥川の河畔で執りおこなわれる綱掛行事を写した作品も多い。畑、林業、綱掛行事といった要素から成り立つ飛鳥の山間部のくらしの特性が浮かび上がる。

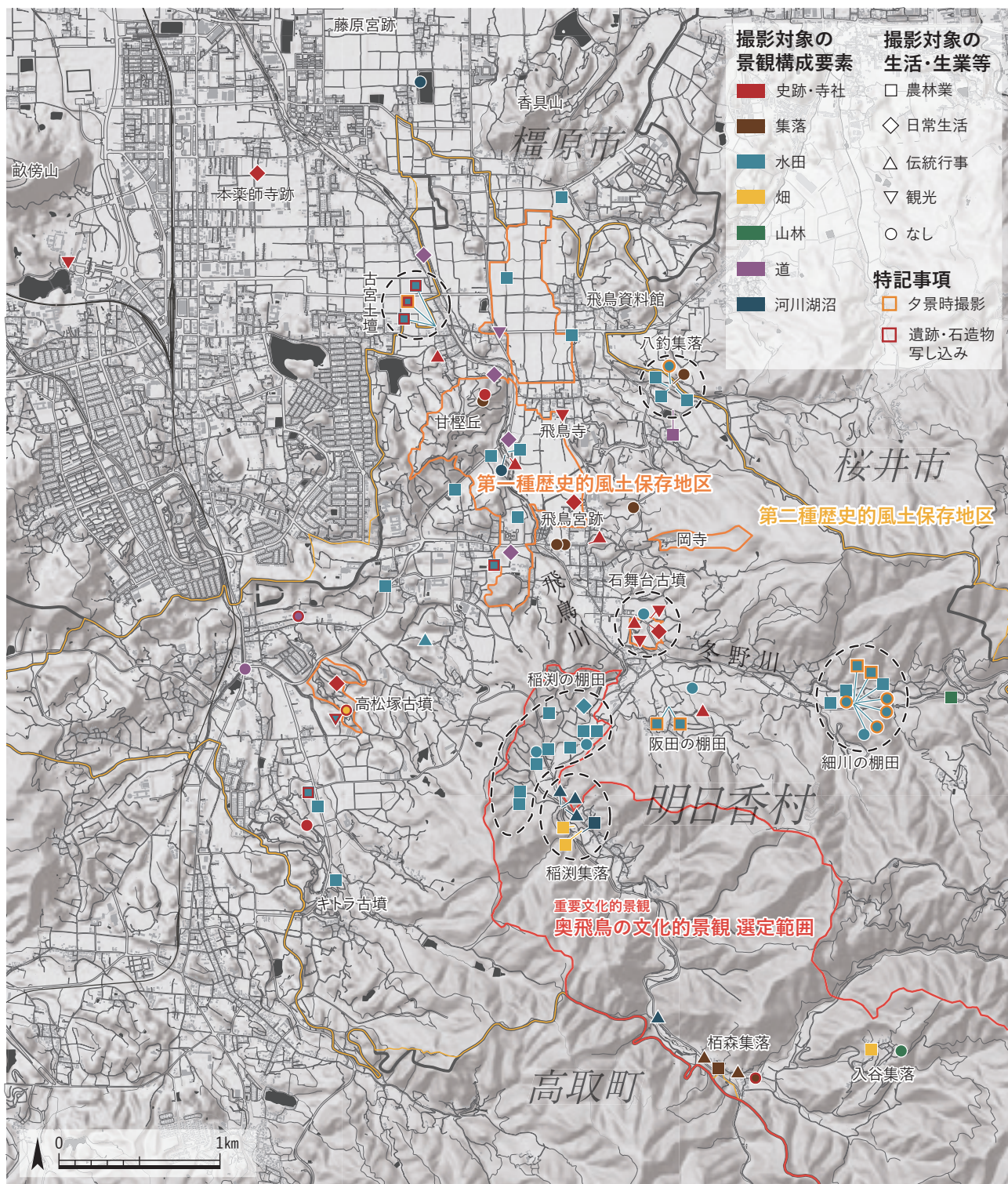


図51 応募作品の撮影地点と対象
基図に基盤地図情報、地理院地図を使用。

山地の狭隘な谷筋に営まれる栢森や稲渚集落の下流には、やや開析が進んだ傾斜地に稲渚の棚田が広がる。冬野川沿いに広がる細川の棚田とあわせ、二つの棚田は多くの作品の対象とされた。丘陵地に広がる棚田が飛鳥を特徴づける生業の景観として認識されていることがわかる。一方、明日香村域の耕地面積366haのうち、畑及び樹園地は99haを占めるものの⁵⁾、ミカンやカキなどの果樹園を写した写真はほとんどなかった。

飛鳥宮跡や飛鳥寺などが位置する、狭義の飛鳥で撮られた作品の対象は、水田に限らず史跡・寺社や集落、道など多岐にわたる。水田を写した写真でも、遺跡の土壇や寺院の礎を写し込むなど、多様な要素が複合的に織り込まれていた。これらは明日香村域の歴史的風土の枢要を成す、第一種歴史的風土保存地区で多く撮影された。田園風景と遺跡・寺院が一体となった歴史的風土の様相が捉えられているといえよう。



図52 「京に飛鳥の飾り木を」(渡邊征二郎氏撮影)

知られざる飛鳥の相貌 「奥飛鳥の文化的景観」選定範囲で撮影された作品には、重要文化的景観選定に係る保存調査では特定していなかった文化的景観の一面を表現するものがあつた。例えば、受賞作品の「京に飛鳥の飾り木を」(渡邊征二郎氏・図52)は、栢森集落内での木材加工の場面を切り取っている。明治期には奥飛鳥から材木や炭が産出されており⁶⁾、林業は地域の伝統的な生業である。この写真は、撮影技術の点だけでなく、奥飛鳥の山のくらしの一面をよく切り取った点でも貴重である。

同じく受賞作品の「ベストポジション」(沼田邦雄氏・図53)には、大字稲渕に位置する飛鳥川の飛び石に腰掛け、田植え後の育苗箱を洗う場面が写された。飛び石は『万葉集』に詠まれた石橋を想起させる歴史遺産として村の史跡に指定され、重要文化的景観の重要な構成要素にもなっている。しかし、写真では育苗箱の泥を落とす洗い場として使われている。撮影者によれば、育苗箱を川上に放り投げ、流れて来る箱を飛び石で絡めとりながら洗っていたという。こうした利用のほか、飛び石のほとは盆迎えの場にもなる⁷⁾。飛び石は飛鳥川という自然や『万葉集』という歴史を基層としつつ、現在の生活・生業の上でも多層的に意味づけられた場所として理解できる。

これらの写真は、普段目にすることが稀な場面を捉え、飛鳥の景観の知られざる相貌を記録している。いずれも固定化された構図・対象ではなく、地域住民の営みによって立ち現れる光景を上手く表現している。地域の豊かな景観像を多角的に発信する上でも大変貴重である。



図53 「ベストポジション」(沼田邦雄氏撮影)

3 景観の認識と表象

撮影者のコメントにみる景観認識 写真の応募票には、作品に関するコメントの記載欄を設けている。多くは撮影対象の説明が記されるが、情景を目にした感想や、作品に込めた思いが記入される場合がある。表5にはそうした撮影者の感想や思いを撮影対象ごとに分類した。今回のテーマである地域の生活・生業への関心を示すコメントに次いで、水田や畑、集落といった景観に古代から連綿と続く不変性を感じ取り、表現したコメントが多い。実際には、この50年間を通して飛鳥の景観にはある程度の変化が生じているものの⁸⁾、撮影者は現在の景観に、飛鳥時代の歴史や『万葉集』に詠まれた風景を投影する傾向が見出せる。こうした古代イメージに由来する景観認識は、遺跡と生活が一体となった飛鳥の景観を撮影する源泉となっているのであろう。また、様々な景観に郷愁や癒しを感じており、古代から引き継がれる(と認識されている)景観が撮影者に悠久の思いや郷愁を去来させ、撮影を通してそれが表象されているといえる。

特定の撮影対象の表象 図51に示したような、多数の撮影者によって捉えられた特定の景観には、共通する景観認識や飛鳥イメージが表象されている可能性がある。以下では、とりわけ応募作品の撮影が集中した、細川の棚田、古宮土壇、八釣集落の3例をあげる(図51参照)。

稲渕の棚田を撮影した地点が散在しているのとは対照的に、細川の棚田を捉えた10点の撮影地点は非常に近接している。うち7点は全く同じ地点から撮影された。ここは県道155号多武峰見瀬線沿いの区画であり、近隣に駐車が容易なため、多くの撮影者がここから撮影に臨んだものと考えられる。こうした展望に適した地点があることに加え、同所からは金剛山地や二上山に沈む夕焼けを収めることができる点も、作品数の多さと関係しているよう。実際、ここから撮影された写真は2枚を除く5枚が夕景を捉えている。このうち、「明日香の夕焼け」(ほ

表5 撮影者の景観認識に関わるコメント

		コメントの内容					
		総数	生活生業	古代不変	自然	郷愁	癒し
撮影対象	史跡・寺社	15	1		1	1	1
	集落	11	2	3			
	水田	48	11	7		2	4
	畑	5	1	1		1	
	山林	4	1		2		
	道路	8				1	
	河川湖沼	7	1		1	2	1

ち氏・図54)は来館者投票で最多となる72票を獲得した(投票総数618票)。撮影者は「古代から変わらない、夕空の風景と、人々の歴史を感じる棚田の風景に感無量のものを感じ、写真に収めました」とコメントを付している。夕焼けという古代(以前)から不変の現象を捉え、人々の営みと悠久の歴史を感じさせる棚田を美しく表現している点が高く評価された。棚田の景観を通して古代からの不変性を表象している好例である。

第13回以前の写真コンテストでも、細川の棚田を主題とした作品は9点が入選し、うち5点が夕景を写している。この構図は、明日香村を紹介する観光ガイドブックやパンフレットなどにも多用され、「日本人の心のふるさと」としての飛鳥を代表する景観の一つとなっている。

一方で、同一地点から捉えた細川の棚田は、どうしても似たような風景写真にならざるを得ない。作品展では、細川の棚田を写した作品をまとめて展示したためでもあろうが、来館者アンケートに「棚田の写真ばかりで面白くない」というコメントが寄せられた。特定の対象を写した表象の生産／再生産は景観認識や飛鳥イメージの硬直化を招く可能性もあるだろう。

古宮土壇を取り巻く古宮遺跡は、推古天皇の小墾田宮の候補地に目されてきた。しかし、土壇自体は飛鳥時代よりもはるかに後世の遺構である⁹⁾。にもかかわらず、水田のなかに残る土壇は、その上に生える榎とともに撮影者の人気を集めている。

土壇を東から捉えて背景に畝傍山を配し、耕作する人や夕陽を写し込むのが定番の構図である。特に、水田に空が反射する田植えの時期や、畦に彼岸花が咲き誇る時期には、多くのカメラマンで賑わう。ただし、周囲には畦への立ち入りを禁止する看板が設けられるなど、地域住民の生活・生業への悪影響も懸念される。

明日香村大字八釣の集落を写した写真は5点が集まった。多くは同一の構図を取り、前景に水田、中景に集落とその背後の林、後景に畝傍山、二上山を配する。この画角は、入江泰吉が1979年に撮影した「飛鳥八釣の里」に端緒を持つと考えられる。撮影者は、入江のような先行する写真家の影響も受けている可能性がある。



図54 「明日香の夕焼け」(ぼち氏撮影)

4 おわりに

本稿では、飛鳥資料館第14回写真コンテスト「飛鳥のくらし」に寄せられた作品をもとに、飛鳥の景観とその表象に関する考察を試みた。撮影者は、飛鳥の現在の土地利用や景観保護施策の影響を受けつつ、撮影を通じて古代飛鳥のイメージに由来する不変性や悠久性を表象している場合があることが確認できた。こうした景観表象の生産／再生産は、特定のイメージの硬直化につながる恐れもあるが、地域住民との出会いを契機として、知られざる飛鳥の景観の相貌を引き出している。このような、撮影者が各自の視点から捉えた光景は、飛鳥地域の文化遺産や景観の魅力を多角的・立体的に発見・発信する上で、今後も重要な意義を持つといえよう。

(竹内祥一朗)

本研究はJSPS科研費JP23K18740の成果を含む。

註

- 1) 麻生将・長谷川奨悟・網島聖「人文地理学研究における視覚資料利用の基礎的研究－絵画・写真の構図に着目して－」『空間・社会・地理思想』22、2019。
- 2) 井上直夫・西田紀子「地域景観の魅力発信の試み－飛鳥資料館写真コンテスト－」『紀要 2016』。
- 3) 文化景観は自然景観に對置される用語で、人間活動によって形成された景観全般を指す。文化的景観は、文化景観のうち文化遺産として良好に評価できるものを指す。
- 4) 明日香村域以外にも、橿原市や桜井市の山林を中心として古都保存法に基づく歴史的風土保存地区が設定されている。
- 5) 2020年農林業センサスによる。
- 6) 「明治十八年 農工商衰頹原因調査」『奈良県庁文書』(奈良県立図書情報館蔵)による。
- 7) 奈良県高市郡明日香村「『奥飛鳥の文化的景観』保存計画」、42頁。
- 8) 西田紀子・飯田ゆりあ「懐かしの原風景－明日香村史跡研究会撮影写真からみる飛鳥の半世紀－」『奈良研論叢 V』、2023。
- 9) 『藤原概報 I』、3頁。